

# 社会福祉士実習の効果と課題

— 実習指導者と実習生の実態調査を基に —

## A Study about Assessment of the Field Work of Certified Social Workers

— Based on the research of supervisors and students —

長 屋 美穂子\*

Mihoko NAGAYA

**要旨：**社会福祉士の資格は、社会福祉士及び介護福祉士法（昭和 62 年法律第 30 号）による国家資格である。社会福祉士国家試験は、社会福祉士として必要な知識及び技能について筆記試験の方法により行われ、その試験は現在 18 指定科目が設定されている。そのなかには相談援助実習（以後は実習と略する）が含まれていて履修が義務づけられる。現在行なっている実習は、まず実習前は配属先での打ち合せや事前学習等の準備を行い、そして法律で指定された福祉施設等において実習をさせていただく。実習後は学内において個人・グループの報告会や総括などが行われる。実習前・中・後を総合すると、多大なるエネルギーと時間を要することになると思われる。実習生の各自が行なった実習においてどのようなことが学習でき把握できたのか、その結果について、実習生はもちろん、実習先や送り出す養成校にとって重要なことのひとつである。相談援助者としてのあり方を見るには様々な方法が考えられるが、今回は実習における評価に注目した。なお、本校が依頼している評価とは別に、実習先の指導者と実習生に対し双方の評価の程度を確認したいとアンケート調査を実施した。

**キーワード：**実習指導者、実習生、評価、効果、課題

### 1. 目 的

社会福祉士は、専門的知識及び技術を持って、身体上若しくは精神上の障害があること又は環境上の理由により日常生活を営むのに支障がある者の福祉に関する相談に応じ、助言、指導、福祉サービスを提供する者又は医師その他の保健医療サービスを提供する者その他の関係者との連絡及び調整その他の援助を行うことを業とする者で、一定の受験資格を有する者が国家試験を受験し、これに合格した者が所定の登録を受けることにより、社会福祉士の資格を取得することができる。

上記の条件を達成するには、かなりの知識、技術が求められる。必要不可欠のひとつとして、まずは福祉施設等を利用している方、そしてその利用者に対応している施設等の職員とのかかわ

---

\* ながや みほこ 文教大学人間科学部

り方の学習が必要であり基本となると思われる。

ほとんどの実習生にとって福祉施設等の実習は初めての経験である。実習期間は実質 24 日間以上と決められている。実習前は実習計画書の作成・実習配属先での打ち合わせ・実習全般についての事前学習等を行い、実習中は実習計画書を基に実習場面での対応と援助を行いながら実習ノートの記録や心身との闘い、実習後は実習記録ノートを基に視点や方法の整理を行なう等実習体験を振り返りながら学内報告会での個人・グループの発表用資料を作成する等の準備を行ない総括する。学外実習は実習生にとって大きな社会勉強のひとつであり、実習中の経験は将来に影響を与えるかもしれない。また、事前学習の程度や知識さらに意欲なども関係し、実習効果が異なると予想できる。

一方実習先は、受け入れる体制を整え実習前の打ち合わせの資料等の準備・実習中の指導・実習評価表の記入に費やされる労力・時間は大きな負担になっていると思われる。

実習において、実習生はどのようなことが学習でき把握できたのかあるいはできなかったことや疑問に残ったこと等、その結果とのかかわりについて、実習生・実習先・養成校にとって重要な問題であると考えられる。

社会福祉士実習の教育・指導内容の改正が平成 24 年度に行われ 3 年が経過した。

実習生の実習成果を見るには様々な方法が考えられるが、今回は実習評価に視点を置いた。

本研究は、本校が依頼している成績に関わる評価とは別に設定し、実習先の指導者から見た実習生に対する評価、そして実習生の自己評価についてアンケート用紙による調査を行い課題等について検討する。

## 2. 視点および方法

実習生に対しては、実習前に可能な限り面談を行うなどし、個々の持つ問題を極力解消させ実習先に送り出す。なお実習生からの質問等については、いつでも受けられるように連絡可能な体制をとっている。実習中は巡回訪問時や帰校時に面談を受けることで、個人差はあるものの、実習生は実習前より成長したように感じる。福祉の援助を必要としている人々は、それぞれが多種多様な歴史があり、相談援助者には個々人に適した対応が求められる。その相談援助者としてのあり方を見るにはいろいろな方法が考えられ、特に人と関わるに当たり基本的な事柄について問うものである。

アンケート用紙による調査事項は下記のとおりである

- ・ 調査時期 平成 24・25・26 年度の各 9 月～11 月
  - ・ 調査方法 実習指導者に対しては、アンケート調査用紙を送付し記入後返送していただく  
実習生に対しては、アンケート調査用紙を実習終了後に学内にて手渡しし 2 週間以内に回収
  - ・ 調査内容 実習指導者・実習生とも同じ内容 15 項目で 5 段階にて評価していただく  
15 項目の評価内容を下記に示す
- ①第 1 印象    ②礼儀（挨拶を含む）    ③言葉づかい    ④服装・身だしなみ（髪を含む）  
⑤仕事上の責任感    ⑥積極性・自主性    ⑦根気    ⑧思いやり    ⑨公共に尽くす精神  
⑩事前学習の程度    ⑪実習ノートの書き方    ⑫指導の受け方の態度（利用者等を含む）  
⑬職員の方に対しての態度    ⑭利用者の方に対しての態度    ⑮福祉関係の職業適応度

5 段階の内容を下記に示す

5 大変良い    4 だいたい良い    3 どちらとも言えない    2 あまり良くない    1 全く良くない

### 3. 結 果

調査対象者である実習生数および双方の回収数・率を年度毎に示す。

|         | 平成 24 年度 | 平成 25 年度 | 平成 26 年度  |
|---------|----------|----------|-----------|
| 実習生合計数  | 42       | 35       | 36 (人)    |
| 回収数 (率) |          |          |           |
| 実習生     | 41 (98%) | 34 (97%) | 36 (100%) |
| 指導者     | 40 (95%) | 34 (97%) | 28 ( 78%) |

(1) 年度毎の項目別評価者数による評価点について、特に注目される点を述べる。

平成 24 年度において、双方の最も高い評価についての項目は⑫指導の受け方の態度であり、評価点 5 の選択が多く指導者は 60%、実習生は 58.5%である。双方とも評価点 5・4 に集中しているので評価点 5・4 を合計すると指導者は 95%・実習生は 100%である。この数値から、実習生はまじめに指導を受けていると思われる。なお双方とも評価点 2・1 は 0%である。

全項目中指導者から最も高い評価を受けている項目は④服装・身だしなみについてで、評価点 5 が 65%である。この項目において、実習生は評価点 5・4 に集中しているので評価点 5・4 を合計すると 82.9%となり、服装・身だしなみについてはまず良好と考えられる。④服装・身だしなみ、⑫指導の受け方の態度以外の項目においては、双方とも評価点 4 の選択が多い。

評価点 1 については、指導者が 1 名に対して⑪実習ノートの書き方、実習生 1 名が⑩事前学習の程度について選択している。該当実習生の聞き取り調査によると、事前学習を全くしなかったため実習が思うようにできなく後悔したとの回答である。

双方の評価がほとんど一致している項目は⑫指導の受け方の態度、⑬職員の方に対する態度であり、逆に特に双方の評価の食い違いが大きく生じている項目は⑥積極性・自主性、⑩事前学習の程度、⑪実習ノートの書き方である。⑥積極性・自主性について、評価点 5 において双方に差があり指導者の方が 20%高く評価している。⑩事前学習の程度について、指導者は評価点 4 が多いのに対して、実習生は評価点 3・2 の選択が多い。⑪実習ノートの書き方については、評価点 5 において指導者は実習生に対して 13%が高く評価し、指導者は評価点 4・5 が多いのに対して、実習生は評価点 3・4 が多い。⑥積極性・自主性、⑩事前学習の程度、⑪実習ノートの書き方については、実習生は控えめの評価をしていることと思われる。

平成 25 年度において、双方の最も高い評価についての項目は⑫指導の受け方の態度であり、指導者は 70.6%、実習生は 61.8%である。なお指導者による 70.6%は全項目中最も高い評価となっている。指導者は平成 24 年度より約 10%高く評価されていて、平成 25 年度の実習生は、前年度の実習生より真面目に指導を受けたことと思われる。

評価点 1 については、指導者が 1 名に対して、②礼儀（挨拶を含む）を選択している。指導者によると、挨拶ができないため注意をしたが改善が遅く終盤になりようやく声が出るようになったとの回答である。

双方の評価がほとんど一致している項目は⑦根気、⑨公共に尽くす精神であり、逆に特に双方の評価の食い違いが大きく生じている項目は⑥積極性・自主性、⑩事前学習の程度、⑪実習ノートの書き方、⑮福祉関係の職業適応度である。⑥積極性・自主性について、指導者は評価点 4・5 が多いのに対して、実習生は評価点 4・3 の選択が多い。⑩事前学習の程度について、指導者は評価点 4 が多いのに対して、実習生は評価点 4・3・2 の選択であり、この評価点 4・3・2 はほ

は同じ割合を示している。⑪実習ノートの書き方について、指導者は評価点4が多いのに対して、実習生は評価点3の選択が多い。⑦根気、⑩事前学習の程度、⑪実習ノートの書き方、⑮福祉関係の職業適応度について、実習生は控えめの評価をしていると思われる。⑩事前学習の程度、⑪実習ノートの書き方は、前年度と同様に双方の食い違いが生じた。

平成26年度において、双方の最も高い評価についての項目は⑫指導の受け方の態度であり、評価点5の選択が多く指導者は64.3%、実習生は72.2%である。双方とも評価点5・4のみの選択となっているので、評価点5・4を合計すると双方とも100%である。平成24・25年度においては、指導者の方が評価点5の選択率が高いが、平成26年度は選択率が逆転し指導者より実習生の方が高い。

評価点1については、5名の実習生が選択していて、その項目は①第一印象、④服装・身だしなみ、⑩事前学習の程度、⑪実習ノートの書き方で、該当実習生の聞き取り調査によると、各自が反省し今後の課題としたいとの回答であった。なお、平成24・25年度より評価点1の選択者が多くなっている。

双方の評価がほとんど一致している項目は⑧思いやり、⑫指導の受け方の態度であり、逆に特に双方の評価の食い違いが生じている項目は⑥積極性・自主性、⑩事前学習の程度、⑪実習ノートの書き方、⑮福祉関係の職業適応度である。⑥積極性・自主性について、指導者は評価点4・5が多いのに対して、実習生1名が評価点5を選択しているが、多くの実習生は評価点4・3が多い。⑩事前学習の程度については、双方とも評価点4・3の選択が多いが、選択の割合率が異なる。⑪実習ノートの書き方について、指導者は評価点4・5が多いのに対して、実習生は評価点4・3が多い。福祉関係の職業適応度について、指導者は評価点4・5が多いのに対して、実習生は評価点4・3が多い。⑩事前学習の程度、⑪実習ノートの書き方は、平成24・25年度と同様に双方の食い違いが生じた。

年度毎の15項目の内容別に5段階評価された結果によると、各年度の実習生の特徴の一端をうかがうことができる。全年度に共通していることとして評価内容15項目中、事前学習不足であり実習ノートの書き方に苦戦しているように思われる。

事前学習不足については、実習生に配属先を提示してから実習に入るまでの期間が2～3か月ということもあり、理由のひとつとして学内での履修科目の学習等をしながら、実習についての事前学習の時間が作れないことが考えられる。実習ノートの書き方については、事前学習との関係性があると思われる。個人差はあるが、実習施設等の状況の把握不足、職員・利用者との対応に問題が生じている、実習記録の書き方に慣れていない、あるいは文章力のなさなどが考えられる。上記の2点の問題については、時間的に余裕があれば、多少改善されることが予想できる。

(注 評価点は多い方を先に記す)

## (2) 年度毎の項目別平均評価について、特に注目される点を述べる。

平成24年度において、双方が最も高く評価した項目について、指導者の場合は項目④服装・身だしなみで評価点4.6、実習生の場合は項目⑫指導の受け方の態度であり評価点4.59である。逆に指導者が最も低く評価した項目は⑨公共に尽くす精神、⑩事前学習の程度でありこの2項目とも同じ評価点で3.87、実習生の自己評価の低い項目は⑩事前学習の程度であり評価点3.24である。双方の差がほとんどなく高い評価点の項目は⑫指導の受け方の態度であり、指導者は評価点4.55、実習生は評価点4.59である。また双方の差が評価点0.5以上の食い違いが見られる項目は⑩事前学習の程度、⑮福祉関係の職業適応度である。

平成25年度において、双方が最も高く評価した項目は同じ⑫指導の受け方の態度で、指導者

は評価点 4.59、実習生は評価点 4.62 である。逆に指導者が最も低く評価した項目は⑩事前学習の程度で評価点 3.88、実習生は⑪実習ノートの書き方で評価点 3.26 である。双方の差がほとんどなく高い評価点の項目は⑫指導の受け方の態度であり、指導者は評価点 4.59、実習生は評価点 4.62 で、平成 24 年度と同じ傾向にある。また双方の差が評価点 0.5 以上の食い違いが見られる項目は⑥積極性・自主性、⑩事前学習の程度、⑪実習ノートの書き方、⑮福祉関係の職業適応度であるが、⑮福祉関係の職業適応度は評価点約 1.0 の食い違いが生じている。

平成 26 年度において、双方が最も高く評価した項目は同じ⑫指導の受け方の態度であり指導者は評価点 4.64、実習生は評価点 4.72 である。逆に指導者が最も低く評価した項目は⑩事前学習の程度で評価点 3.81、実習生は項目⑪実習ノートの書き方で評価点 3.42 である。双方の差がほとんどなく高い評価点の項目は⑫指導の受け方の態度で、指導者は評価点 4.64、実習生は評価点 4.72 であり、平成 24・25 年度と同じ傾向にある。また双方の差が評価点 0.5 以上の食い違いがみられる項目は⑥積極性・自主性である。

指導者は、平成 24 年度において実習生より 14 項目を、平成 25 年度は 11 項目を、平成 26 年度は 8 項目について高く評価しているが、年度が進むにつれ評価の仕方が逆転している。

全年度とも、⑫指導の受け方の態度が最も高く評価され、双方ともに評価点は約 4.6 である。特に実習生の自己評価の低い項目は⑩事前学習の程度、⑪実習ノートの書き方で評価点は約 3.5 であるが、指導者は実習生より約 0.5 高く評価している。

福祉施設等での実習を終えて注目されるのが項目⑮福祉関係の職業適応度であるが、全年度において実習生の評価は低く、特に平成 25 年度は双方の評価の差が大きい。しかし、指導者は実習生に対して高く評価している。

#### 4. 考 察

平成 24・25・26 年度の実習指導者と実習生に対して 3 年連続で同じ内容のアンケート調査を行ったが、各年度により特徴が見られた。多少の差はあるものの、全年度において項目⑫指導の受け方の態度について双方の評価が高く、実習生はまじめに実習を行っていると評価できる。実習生の自己評価が特に低い項目は、多少の差はあるが全年度とも⑥積極性・自主性、⑩事前学習の程度、⑪実習ノートの書き方、⑮福祉従事者適応度があげられる。これらの項目についての問題解消のためには、実習前の学内指導内容を見直し、実習指導者と一層密に連絡を取り合うことが、双方の評価を上げることになると思われる。

なお実習生の聞き取り調査から、挨拶のタイミング・職員や利用者に対してのコミュニケーションの取り方・職員同士のやり取りの中から感じることで、援助者としての積極性、福祉施設の現場ならではの遭遇した場面で対応することにより多くのことを学習している。また今回のアンケート用紙に記入するにあたり、援助者としての一端ではあるがアンケート用紙の内容から基本となる姿勢を感じた実習生が数人いて、実習前にも同じようなアンケート調査を実施しておけば、援助者としての必要性に気づき、実習生の視点に変化があり、ある程度の準備ができたかも知れない。実習での経験を活かし、援助者としての第一歩となることを願いたい。

実習生が満足できなかったことについては各自が反省し、将来の動機づけにつながると考えられる。実習後の実習生は、個人差はあるが実習前より自信に満ちた表情をしているように見える。社会での貴重な体験は、さまざまな観点から実習生自身が自己を見つめる絶好の機会となり、計り知れない大きな学習効果を上げていると評価できる。

**謝辞** 本研究は、平成 24・25・26 年度の実習指導者・実習生の温かいご協力により研究することができました。皆様方に感謝申し上げます。

〈付記〉 本研究は、平成 24・25・26 年度文教大学人間科学部共同研究費の一部を使用して行ないました。